

シルクロードの日本人伝説

寫信彦

プロフィール
1942年中国・南京生まれ。ジャーナリスト。慶応大学経済学部卒業後、毎日新聞社入社。東京本社経済部、ワシントン特派員等を経て1987年からフリーに。TBSテレビ「プロロードキャスター」「朝スバツ」等出演。現在はTBSラジオ「森本殺郎・スタンバイ!」他、多数出演。著書『日本兵捕虜はシルクロードにオペラハウスを建てた(角川書店)』等多数。

小さい頃から中国大陸、中央アジア、シルクロード——といった言葉に夢やロマンを感じていた。私が一九四二年に中国で生まれ、一年ほど上海で暮らしたことや、父も新聞記者で中国やアジア地域を駆け巡り、時々取材の話などを聞いていたためだろう。私と母は敗戦間近の一九四四年末に帰国しているが中国滞在中の記憶は全くない。時々、中国にいた頃の写真を見て記憶を辿るのだが何も覚えていない。

母は、当時としては飛んでいる女性だった。女子専門学校を卒業後、京都のデパートの宣伝部に勤務。アメリカ行きを望んだが日米関係悪化により北京へ渡り、北京の中学校で中国人に日本語等を教えていた。そこで父と知り合い結婚したが、今風に言えば「デキちゃった婚」だったのでないかと思っている。

そんな家庭環境もありわが家には中国関係の書籍がかなり多く、それらの背表紙を見ているうちに興味をもつたように思う。宮崎滔天の『二十三年の夢』やヘーデンの『さまよえる湖』などを読み、ますます大陸にロマンを感じるようになった。

中国には記者となり、一九七〇年代に初めて訪問。以来、仕事や旅行で三〜四年に一回は訪れたが中央アジアはまだ遠かった。ウズベキスタンに初めて足を踏み入れたのは九六年。アジア開発銀行の総裁を務めた千野忠男さん(元大蔵省財務官)の話や聞

き、俄然興味が湧いた。ウズベクは九一年にソ連から独立し、国家づくりのモデルを日本に求めたという。若い志士たちが奔走し途上国から近代国家をつくり、欧米先進国に追いついた歴史を知り「見習うべきは日本だ」と思ったようだ。

ウズベクは数千年前から欧州と中国をつなぐ真ん中に位置し、東西の文物、文化、学問、人間の交流の結節点にあった。天文学や数学、織物文化などに優れ、欧州やインド、ペルシヤ、トルコ、中国、モンゴル、ロシア人などとの交易が盛んで、一五世紀の大航海時代が来るまでは世界の文化の中心的存在だった。しかしその後、鉄道や飛行機、宇宙の時代が到来するにつれ中央アジアの存在感は薄れてゆく。

日本との関係では第二次大戦後、満州で捕虜となった日本の航空工兵が首都のタシケントに、ソ連の四大オペラハウスといわれるナボイ劇場をウズベク人と共に四七年に完成させ、その伝説的秘話が語り継がれてきた。六六年にタシケント市が全壊する大地震に襲われるが、ナボイ劇場は凜としてその美しい姿をとどめた。そして、中央アジア全体に日本人の仕事ぶりや勤勉さ、美徳が伝えられ、有名な観光的建物となった。捕虜になっても後世に恥を残さないような建物を作ろうと決意し、完成させた約五百名の日本兵の伝説が今なお伝えられているのである。

12 みんぱく Information

14 味の根っこ
羊肉泡
今中 崇文

16 文化遺産おもてうら
幻想が作り出す「伝統」
——インドの「野外美術館」
豊山 亜希

18 手芸考
「アイヌ刺しゅう」の担い手たち
齋藤 玲子

20 ながなんちゃ
暗黒物質! なんなんちゃ?
身内 賢太郎

21 次号予告・編集後記

1 エッセイ 千字文
シルクロードの日本人伝説
寫信彦

特集 「負」の遺産

- 2 時の流れにあらがいつづける遺産
竹沢 尚一郎
- 4 水俣病資料館の展示リニューアル
平井 京之介
- 5 南京を語ることは
川瀬 由高
- 7 原爆遺構・被爆品とともに「平和」を考える
——ヒロシマの国際化・観光化
楊 小平
- 8 ダークツーリズムという旅
井出 明

10 ○○してみました世界のフィールド
ソウルの巨大デモ
太田 心平

月刊
みんぱく

8月号目次